

# 吸物語

daith

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

僕は彼女を殺してしまった。それを今も悔やみ、贖罪を願っている。

——これは、阿良々木暦という一人の吸血鬼のお話し。

# 目次

位置エネルギー⇩重量

1



# 位置エネルギー〜重量

「まったく、お前は一体何を考えているんだよ」

「………痛いわ」

「多少、そうなるように拘束しているからな」

いきなりの変態的な発言に対して、ついてこれない読者諸君のために少々時間を遡ろう。

僕の名前は阿良々木曆。直江津高校の第三学年に所属している。

そんな僕は放課後クラスの副委員長として文化祭の準備を、委員長の羽川翼と共に雑談をしながらも行っていた。

途中、忍野からの呼び出し（これがまた、手紙を紙飛行機にして飛ばしてくるなどという、ある意味斬新な方法であることについては、もう慣れたものである）を受けて、急いで帰り支度をして教室を出たところで、背中から

「羽川さんと何を話してたの？」

と、声を掛けられた。

そして振り向きざまに「たつぷりと刃を伸ばしたカッターナイフを口の中に挿入さ

れた。

驚いた僕は咄嗟にカッターの刃を嘯みしめ、パキッと折ってそのまま嘯み砕き吐きつけた。

怯んだ相手に対して、僕は

⇒背負い投げを掛ける。

⇒倒れ伏したところで、素早く拘束。

⇒イマココ。

と、相成った訳である。

「大体なあ、戦場ヶ原。お前は小学校で、『人に刃物を向けてはいけません』って習わなかったのか？」

「……返す言葉もないわ」

ちなみに、彼女の名前は戦場ヶ原ひたぎ。僕のクラスメイトで、深窓の令嬢然とした奴だった。

そのはずなのだ。

「で、なんでこんなことを？」

「……気付いてるんでしょう？」

剣呑な目つきのまま、それこそ今にも伝説の

「くっ、殺せ！」

のセリフとか言いそうな雰囲気、戦場ヶ原は僕に問う。

こんな深窓の令嬢いてたまるか。

(いや、しかしある意味いそうではあるな)

こんな益体のないことを考えながらも、僕は答える。

「?何に?」

「とぼけないで」

と、言われても僕には全く心当たりがない。

だって、戦場ヶ原ひたぎとの接点なんて、精々今朝遅刻しそうになって階段を駆け上がったいたら、落ちてきたのを受け止めたぐらいで……あ、まさか。

「そうよ」

「え、マジで?」

「あなた、私を受け止めたとき思ったでしょう。軽すぎるって」

「……………」

「そう、私には――重さがない」

体重がない。

「と言っても、全くないって訳ではないのよ。私の身長・体格だと、平均体重は40kg後

半強というところらしいのだけれど」

50 kgらしい。

「40 kg後半強というところらしいのだけれど」

戦場ヶ原は主張した。

譲らないみたいだ。

「でも、実際の体重は、5 kg」

5 kg。

精々、生まれたばかりの赤子より、一回り重い程度。

「まあ、正確には、体重計が表示する重量が5 kgというだけなのだけれど」

「ふむ」

「本人としては、自覚はないわ。40 kg後半強だった頃も、私自身は今も、何も変わらな

い」

「ふむ、ふむ」

成程成程。

「それは、先ほどのカッターを始めとする身体中にある装備の数々から鑑みるに、身に着けている物にもある程度及ぶわけだ」

どの程度の範囲まで及ぶかは分からないが。



成程ね。だとしたら、これはこちら側の案件だ。

「何はともあれ、いくつかお前に言うことがある」

「……」

「まず、一つ。僕は、お前の身体の異常に先程気付いた」

「え？」

「まあ、詰る所今朝の段階では全く気付いてなかった」

「……フツ」

「嘲笑われた!？」

「いやいや、この件については僕の問題じゃないぞ。」

「というと？」

「さつき、そこでまだ残って仕事中の委員長が言ってたんだがな」

「この場合、重量はそんなに問題じゃないんだ。」

「？」

「うちの学校の正面の昇降口のところにある階段つてさ、螺旋階段だろ」

「だから、中央部分は吹き抜けになっている。」

「んで、お前は何故かは知らんが、4階付近から落ちてきて、その時僕は一階の階段を昇り始めたところだった訳だ」

つまり、彼我の差は約15 mはあった。

「……………」

「位置エネルギーってのは恐ろしいもんでな。そんなだけあれば、僕のところに落ちるまでに40 kg後半半強なら60 km/h、5 kgでも50 km/hぐらいにはなる訳だ」

そんなもの、受け止めようものなら……………。

「普通は腕が折れて、お前もただじゃ済まないな」

「じゃあ、何ぞ「そう、普通はな」……………」

「という訳で改めて自己紹介だ。」

僕の名前は、阿良々木暦。私立直江津高校3年。でもって、「

一息ついて、僕はこう続けた。

「一応、吸血鬼です」

以後よろしく、とね。